

第665号

令和2年11月23日

題字は二代真柱様

大阪市北区池田町13-17

天理教はるのひ分教会

TEL・FAX

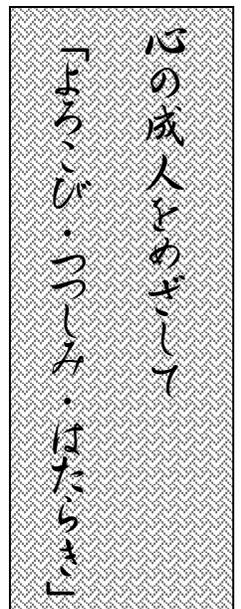
06-6358-2630

暑気ぐらしへ字びと試み

はるのひ館



▶はるのひホームページ▶
▶QRコード▶
▶毎月発行▶
▶1日1回▶
▶29日▶
▶10月▶
▶09日▶



王様に申し上げます。そうですよ、あなた様のことでですよ、王様。

世の中のありとあらゆる困りごとの、一番の元はと申せばあなた様に王様の自覚がないということだと

この私、あなた様の最も身近にお仕えし大切なお役を頂いておりますこの私もようやく気がついてまいりました。ですから、きょうというきょうはぜひとも私のいのちを賭けてもあなた様に王様の自覚をしかと持つて頂き

その上で、王様にふさわしい考え方と生き方、言葉と行動をお願いしたいのです。

そもそもあなた様は一国一城の主(あるじ)、この私を初めとして四十兆にも及ぶ細胞が忠実な家来となつてお仕えしてまさに仕えるという言葉そのままに、昼となく夜となく黙々とただひたすらに働いております。

脳は脳、心臓は心臓、肺は肺というふうそれぞれの部署ごとに数えきれない家来たちが情報を交換し合いながら一致団結してあなた様の生命を創り出し、健康を保ち続けております。ところが、あなた様ときたら全く頓着なく暴飲暴食、勝手のしほうだい。確かに、あなた様は広大な国と立派な城、純真無垢なる家来に囲まれて

これほど裕福なお立場はございません。しかし、いかに裕福でもあまりに粗末にしますとやがて失う時がまいります。国衰え城古びて家来たちが去つてゆくその時に至つて後悔してももはや遅いのです。

そして最も重要なことは、ほかの方々と王様同士らしいおつきあいをして平和で楽しい世界を築いて頂くことです。どなた様も裕福な王様ですから、暴言暴力などもつてのほか、決して敵対せず陽気暮らしを味わつて頂きたいものです。

秋季大祭祭典講話

会長 芝 太郎

『世界と生命の真実』

改めて、皆さんこんにちは。ただいま十月、天理教の教えが始まりました天保九年の立教の由来の月、秋季大祭を共々につとめていただきました。ありがとうございます。では、いつものように信仰の勉強をさせて頂きましょう。

今の鈴木朱美さんの原稿を、お父さんの芝光男さんが読んでくれました。『天理教教典』の「心のほこり」の勉強をしてくれたんですね。いい話でしたね、素直な自分の言葉でそのまま書いてくれて、なかなかよくまとまってもいたと思います。皆さんはどうでしたか？

天理を離れて、天理がよかったなあと。天理が素晴らしい町だったというのが改めて思えた、というふうに言っていました。そんなもんやね。中にどっぶり入ってたら、中のことが分からない。外に出て初めてその値打ちがわかる。まあ朱美

の場合も生まれてずっと大学までね、天理でいたわけですから、結婚して初めて埼玉っていう場所。世間やね、世間の風に冷たい風に吹かれて、初めて天理は暖かかったなあ、と思えたんでしょう。

心の鏡

じゃあ、今日のお話ですが、今日はそうですね、今聞いていました心の埃とそして『教えの道しるべ』で読みました「出直し」、さらに「おつとめ」この三つの関係した話をしたいと思います。うまくまとまればいいなと思うんですけども、まず、心の埃を教祖は教えてくださいました。

朱美がさつき書いてくれた通り、八つのほこりというのは「をしい、ほしい、にくい、かわい、うらみ、はらだち、よく、こうまん。他に嘘とついでしよう」。こういう心の埃があるから気をつけましょうと教えていただいたんですが、自分の心に埃があるとか、濁っている、汚れている、曇っていると思うかどうか。自分のことはなかなか分からないですね。そのバロメーターが僕はあると思うんですね。心に埃がついているかどうか。曇っているか濁っているか、そのバロメーター、物差しがあります。実は私も埃だらけなんですけれど

も、その埃がついていると思う目安はね、自分が喜べない時ですね。芯から喜べない時、本当に喜べない、そういうのは埃がついていると思うね。

心はよく鏡に例えられます。鏡の例がよく出てきますね。心は鏡のようなもんだと。何でも映る。綺麗に澄んだ鏡は真実がそのまま映ります。参拝場のあの鏡なんかね、よく磨いてもらっていますので、今日なんかも綺麗にくっきり映っています。ところが、曇ってくるよね、埃なんかで曇ってくるよぼやけて映ったり、歪んで映ったりします。心も鏡と一緒に埃がなくなってくっきりと澄んでいる時は真実が映る。はつきりくつきり映ると思う。

真実とは何か、それはね先ほどの話になりました出直しと関係あるんですね。いつも言いますように、私たち人間が生きていくということはどういうことかというところ、このテーブルが生きている世界とします。そして自分はこのテーブルの上にいる。若ければ若いほど、元気であれば元気であるほど、テーブルの真ん中にいると思います。安心していい。このテーブルから落ちたら、外は死の世界だから病気になったりね、危ないですよと言われたら、このテーブルの端っこの方にだんだん行って、もう危ないかもしれないと、死ぬのは

怖いなあ。そこで死を初めて感じますよね。普段は感じることはありません。テーブルの生きている真ん中にいるわけですからね。病気でもしない限り、あるいは普段から体の弱い人でもない限りは、死というのは遠い。あんまり感じません。でもしかし、テーブルの真ん中にいるように生きていると真ん中というのはあり得るかどうかな？と思うと、教祖の教えからすると私たちは自分では生きてない。だからかきもの・かりものというところは、生命を体をほとんどお任せでね、生きていくわけです。

例えば呼吸。生きていく上で一番大切な呼吸でさえね、いつものまにか吸ったり吐いたりしている。心臓だっけいつものまにか動いていて動いていることを忘れてますよ。動いてることも感じないくらい。ということは自分でしてないということとは、いつ止まるかわからない。あなたまかせなんですよね。あなたまかせだからのんびり生きていられるんで、もしも自分で心臓動かさないと生きてはいけないとか、自分でそのつど頑張って吸ったり吐いたり呼吸をしないと生きてはいけないとなったら、もうそれに躍起になります。心臓止まりそうだ、動かさないといけないってね、もう寝てるわけにいかない、吸ったり吐いたり止められないのですから。そしてたら

ね、もしそうして自分で努力して生きているのだったら絶対止めませんよ、心臓なんかね。息だって絶対やめない。

けれどもそれは自分でできない、実際のところね、寝てる間も心臓動かしたり吸ったり吐いたり、とてもできません。できないので、神様がしてくださっている、これが「からだは神からのかしもの・かりもの」というお話です。自分でしていない、貸し主の親神様が、誰彼なしに全ての人に心臓を動かしたり息をさせてくれたりして、責任を持っておこなって下さっている。私達には生命の責任は取りようがない。だからつつい安心するんで、安心していいんですけれども、けれどもそうなると生きてるか死んでるか、この境目に私たちはいるのではないでしょうか？

だから、決していのちのテーブルの真ん中に生きてるわけじゃない。いつ心臓が止まるか、息一つが止まるかわからないという事は、このテーブルの境目にいるんです。これが世界と生命の真実なんです。火・水・風の恵みを受けて生きている、これが人間の真実だよ、と教祖（おやさま）おっしゃる。その生きてるか死んでるかその境目の、生きているほうに、僅かやけどね、引っかかって生きているのが僕たち。これが真実。

でもこの真実は忘れるんですよ。見えないんですよ、まるで真ん中にいるとつい勘違いしてしまう。真ん中にあると思うから安心して、死ぬことは心配しないで生きている。そして病気になったり癌になったと言われた、その時、初めて死ぬかもしれないと死を意識するのですけれども、そうではなくて、生きるというのは、ど真ん中の平たい所じゃなくてテーブルのはしっこ、生きるか死ぬか、まるで細いロープです。病気になった時だけでなくいつもいつだってロープの綱渡り、僕たちはねロープの綱渡りで、本当に狭いロープの上をつたっている。踏み外したら、真つ逆さまに死の世界に落ちます。どうしてそんなロープの上を歩いているのに、みんな心配しなですかね。真実が見えてないから、真実をついつい忘れるからね。

十本の命綱

今までの先人はね、人生はだから儚（はかな）いと言ってきた。いつ死ぬかわからない、あつという間に亡くなってしまいか分からない、この世は儚い。だからそんな俗世界から離れてね、山に籠もって清らかな生活をして生きていく。そんなふう考えたりましたんですね。でも教祖は生きるか死

ぬかわからないけれども、親神様の御守護があれば、生きていけるんですよ。確かに一人一人生命と健康の努力をしているけれど、しかし生命と健康は、鼓動、呼吸、平熱などなどほとんど無意識の結果です、努力のしようがない。親神の守護としか言いようがない。つまり生きていくというより生かされている。

だからこの真実が心の鏡にくっきり映ったら、もうなんとも言えませんよ。ちよつと踏みはずしたら、死という千尋の谷に落ちるのに、今日もロープの上にいるよ、すごいなあ。それも自分でロープの上にいるんじゃないかと、まあ言ってみれば命綱がいっぱいある。火・水・風の命綱、心臓を動かしてくれはる、息ができる、骨つっぱりや、皮つなぎも「十全のご守護」つまり十本の命綱に守られている。足もとは一本のロープやから、いつ落ちるかかわからないけれども、命綱がたくさんあって、親神様が渡してくださる命綱に守られて、それでそのロープの上を渡っている。だからすごいなあ。この命綱のおかげで、十本の命の綱のおかげで生かされている、この真実が心の鏡にくっきり映ったら、もう何も言うことないね。少々のことがあってもね。

お金が足りない、ものが足りない、人からあんなこと言わ

れた、こんなことされた。それはもういっぱい色々お互いにあるんですけども。しかし今、このロープの上、生きていくという命のロープの上を伝っていたら、もう何も言うことない。後のことは何とかなる。なんとかなることばかりです。しかし命のこのロープだけはね、私たちの力では何ともならない。

もう落ちるとなったら落ちるしかないですね。今、必死になつてすがりつくんです。教祖が誰にもいつでも「よろこびや」とおっしゃった、そのよろこびとはこの喜びです、生命の真実によつて生かされているこの喜びです。この真実です。命のロープの上を自分の力ではなくて、親神様の「十柱の神様」の働きを頂いて、命綱を握って、命のロープを伝わっている。

世間では先ほど言ったように、多くの人は生きるといふのは、この広いテーブルのど真ん中にいて、安心していいんだ。今は元氣な限りは死は遠い。世の中の多くの人はそう思う。しかし教祖の話を聞くと私はそうは思えない。みんなテーブルのはしっこ、いわば命のロープの上を必死に歩いている。今もそのロープの上を歩いているということは、その真実は恐ろしい真実とも言えます。

だからあんまり見たくない、忘れたい。気づきたくない、安心してもっと安心して生きていたいのです。でもその真実をこの恐ろしい真実を一本の危ういロープの上を歩いていくという恐ろしい真実を、しっかりと見つめる。そして、だからこそ今は落ちてない、だからこそすごい喜び。喜びなんていう言葉ではもう表せない。もう感激と言うか、感動と言うか、何とも言えないですよ。

朝夕におつとめを！

それを思い出すのが、その真実をしっかりと心に刻むことがおつとめだと思う。おつとめは命に関わっているんです。かんなろだのおつとめは世界と命を作る、神様のお働きを目の当たりにする。あなたがた、世界はこんな風にして作られているんですよ。他の生き物もあなたも命はこんな風にして生きていますよ。作られているんですよ。十の働きが合い寄って、何ともいえない神秘的な働きで、世界と命が作られている。その十本の 命の綱に捕まって、細い細いロープの上を歩いている。これが生きていくということの真実ですよ、教えて下さったのが、僕は教祖だと思っ。

それがねホコリがついてくると、その真実が見えなくなり

ますから、心の鏡が曇って濁って見えなくなるから、だからああでもないこうでもない、いろんなことの生きてることはもう当たり前になって、生きてることは世界のど真ん中に行くと安心しきっているから、もう言いたい放題、したい放題。ちよつとでもその言いたいことが言えなかったり、したいことができなかったりしたら、不足や不満。ああでもないこうでもない。まだまだまだもつと欲しい、もつと欲しいという風に、「欲にきりない泥水」になって、心が埃だらけになっていく。真実が見えなくなる。一本の危ういロープの上を神様の命綱のおかげで、危うく渡っているという、この真実が見えなくなるから、そういう風になるのでしょうか。

教祖の教えは、だから私は真実の教えだというのはそこなんです。ある意味、やつぱり恐ろしい真実を見る。しかしその恐ろしい真実をしっかりと見つめれば、生きていくことの値打ちがどんなに大切な、どんなに素晴らしい、何ものにも代え難いどんな宝物にも代え難い、もうお金にすれば四十兆円の計り知れない財産を持っていて、そして使い放題で使っているんだよ、というふうに貸して下さっている。

だからその真実から一人一人が生きることを始めればね、もう争いもなくなるし、みんなが互い立て合い、自分の命が

尊いんですから、他の人の命ももちろん同じように尊い。その尊い命をどういうふうに使いますか、仲良く助け合って生きていきましょう。陽気暮らしの世界をつくっていきましょう。それが生きていく目的・目標ですよというふうに。

なかなかこんな当たり前のことがわからないのは、元々の真実がわからない、命の綱を危うく通っているということが分らないからありとあらゆるもめ事が、ややこしいことが、次から次へと起きてくる。そういうことだと思いませんか。

命の真実を教えて下さったのが、この立教以来の教祖の教えである。その真実を、私たちはついつい忘れるからおつとめを通して、おつとめによって命のロープを渡っているんだ。十本の親神様の命綱のおかげで、命のロープの上に今立っているんだ。これをしっかり喜ばしてもらって、共に助け合う世の中を作っていきましょう。これが立教の由来の月に私たちが改めて思索し実践していくことだと思えます。ありがとうございます。うございしました。

天理教教典学び

鈴木 朱美

【第七章 かしもの・かりもの】

68頁7行目〜70頁10行目

このほごりの心遣いを反省するよすがとしては、をしい、ほしい、にくい、かわい、うらみ、はらだち、よく、こうまんの八種を挙げ、又、「うそとつしよこれきらい」と戒められている。

親神は、これらの心遣いをあわれと思召され、身上や事情の上に、しるしを見せて、心のほごりを払う節となし、人々を陽気ぐらしへと導かれる。

せかいぢうむねのうちよりこのそうち

神がほうげやしかとみでいよ 三 52

めへくにハがみしやんハいらんもの

神がそれくみわけするぞや 五 4

めへくの心みのうちどのよふな

事でもしかとみなあらわすぞ 十二 171

これみたらどんなものでもしんぢつに

むねのそふちがひとりてけるで

十二 172

即ち、いかなる身上のさわりも事情のもつれも、親神がほ
をきとなつて、銘々の胸の掃除をされる篤い親心のあらわれ
と悟り、すべて、現れて来る理、成つて来る理をよく思案す
るならば、自と、心のほりを払うようになる。かくして、
ほりさえ綺麗に掃除するならば、あとは珍しいすけに浴
して、身上は、病まず弱らず、常に元気に、守護戴ける。

ほりさいすきやかはろた事ならば

あとハめづらしたすけするぞや

三 98

しかるに、人は、心の成人の未熟さから、多くは定命まで
に身上を返すようになる。身上を返すことを、出直しと仰せ
られる。それは、古い着物を脱いで、新しい着物と着かえる
ようなもので、次には、又、我の理と教えられる心一つに、
新しい身上を借りて、この世に解つてくる。

きたくぐバたつねくるならゆてきかそ

よろづいさいのものいんねん

一 6

今回、おしい、ほしい、にくい、かわい、うらみ、はらだ

ち、よく、こうまん

親神様の思し召しに沿わないころづかいのことを
八つのほりにたとえて、おさとしくださっています。

家とか、ほりつて勝手にたまっていきますよね

締め切った密閉した部屋でも、ほりつてたまっていくそ
うです

掃除は、みなさん好きでしょうか？

私は、掃除は好きではありません

でも汚い状態はやっぱり過ごしにくいし、嫌な気持ちにな
り

掃除をしてきれいな部屋見るとすがすがしい気持ちにな
ります

汚い部屋で過ごすよりも、きれいな部屋で過ごすほうがい
いですよね

心でもそうです

日々、払わないと少しずつたまっていきます

払わずにいれば身上・事情で、出るでと、お話では教えてく
ださっています

私自身日々すごしていて

はっとします

今の心はおしよかったな。はらだちだったな。ありがたいと思つてとおらせてもらわなあかんって、と思うとき、たくさんあります

もちろんいつでもということでもできませんが。

八つのほこりの教えというのは、いつでも私のこころにあります

自身の性格の根底にあるものだと思います

なかなか日々すごしていて、ああほこり払わないといけないな、

ありがたいと思わなな、結構やなって思えないと思うんです。でも自然とそう思うことができます。それってなんでかなっておもつと、自分自身がずつと天理で教えに包まれながら育ってきたからなのかなと思つています。

身に染みついているんですよ

私は、いこいの家で生まれてから25歳まで、ずつと天理で育ちました

天理幼稚園から天理大学と社会人を少しです

今は結婚して夫と息子一人とでさいたま市に住んでいます

25歳から天理をでて、外の生活をでておもったのは

天理つてすごくいい街だったんだなと

元々ぼーつとした性格だけど、結婚してからしつかりしてつて

いちおう いわれます。

今でもぼやくつとしているほうやと思いますけど

天理じゃないところでは、ぼーつとしては生きれないんですよ

それがどういう理由で、どんなのかつてのは、なかなかはっきりとは言えないけど

世知辛いとても。

陰口とか、ひしひしと、もつてる悪意とか、向けられる矛先が自分ではなくても圧倒的に天理に住んでいた時よりも、生きづらいだろうな、どうしてそういう風にしかとらえられないんだろう、ということに出会うことがとても多いです

天理で過ごしていたとき、すごくのびのびと生きていたと思います

そういう人に出会ったこともあまりありません。

天理で会う人たちはありのままを受け入れてくれる。そんな印

象を持っています

それはもちろん教えがあったからだと思います。

毎日当たり前に過ごせることをありがたいと思い、こころづ

かに気をつけて、人が喜んでいることをよろこびにする。

教えを学び思いながら過ごす人々

陽気ぐらししながら、めざしながら生活している人がたくさ

ん天理にはいます

そんな街どこにもないですよ

だからでしょうか、いつでも天理に帰りたいって思います

いまだにホームシックがとれません 笑

そんな大好きな街を

ふとしたときに、なんで私は天理出てしまったんだろうって

考えるんです

結婚して8年になります

大好きな天理だったのに、遠く離れた埼玉に嫁いでるのが自

分でも不思議です

別に今の住んでいるところが嫌だとか、不満とかはないです

よ

もちろん自分が決めたことなのですが

友達にもなんでそんな遠くにいったん？

って聞かれます

わからへん 笑

って答えます

なんでか人生の節目節目の時、トントントンって話がすすむ

んです

自分あまりその気じゃないときも、いろいろと算段がつい

てはなしがまとまるんです。

大学行く気がなかったのに、行けるはずなのにに行くとか

だから遠くに嫁いだのも、神さんの思し召しなんかあつて

思っています

あかんもんはあかんくなる、全部神さんがいいようにしてく

れるって思ってます。

だからわたし生きていて、人生でおおきく挫折とか失敗した

って思ったことはないです

もちろんうまくいかないこともあつたし、いやなことたくさん

ありますけど

それでもそのたびに自分にはちょうどいいんやな、節目があ

れば何を表してくれるんやるととらえることができいま

す

悪いことがあったときも今のためにあることなんやと

天理教ってポジティブだなあって思います

もちろんまだまだできていません

はらたつこともあれば、なんでうまいこといかへんねんやっ
たんやろって思うこともたくさんあります

どうにもこうにも自分自身でもどうやったらいいんやろと
気持ちのやり場がない時があります。

心がコントロールできなくて、にっちもさっちもいかないと
き

それはだれしもあることじゃないかなと思うのですが

そういう時に教えがささえになります

自分自身では天理教の教えが！って意識してることはなく

不足不満ばかりじゃあかん、今家族みんな健康でそれだ
けでありがたいやないかと何事も喜ばなと。

こういう人でありなさいって、こういう人でありたいって
う教えというのは、人の心の支えであり指針であって、目標
心よりどころなんやなって改めて思います

生まれたときから教えに囲まれて天理で育ったのは、ほんと
にそれこそありがたく幸せなことやったんだなあってしみ
じみ感じます

今、私がしていかなあかんと思うことは、旦那さんとこど
もに教えを知ってもらうこと

なかなか難しい。旦那さんって奥さんの話聞いてくれないん
ですよ

こどもにも教えるというのも難しいし、

なによりこつちが振り回されて、おしえるどころではなく自
分の心の成人を試されてると感じます

こども対しては自分は教えを学ぶ側ではなく、こどもには手
本とならなければならぬ

手本になるといのはすごく難しい

手本となるには、どう示していけばいいのか考えさせられま
す。そうやって、どうやれば手本になれるのか考えるのも結

構やな

手本になるように、陽気暮らししていこうと思います。



☆お知らせ☆

- ☆ 11月26日(木) 9時 本部月次祭(祭典後に登殿参拝できます)
- ☆ 11月29日(日) 18時 詰所祭

- ☆ 12月6日(日) 女子例会=休会

- ☆ 12月13日(日) 9時半 おぢばがえりひのきしん・男子例会(詰所)

- ☆ 12月18日(金) 10時 女なりもの勉強会(他教会の方優先)

- ☆ 12月22日(火) 前日準備ひのきしん

- ☆ 12月23日(水) 11時 <<納めの月次祭>>

- ☆ 12月26日(土) 9:00 本部・納めの月次祭

- ☆ 12月28日(月) 9時 餅つき(詰所)

- ☆ 12月30日(水) 31日(木) はるのひ分教会・詰所 大掃除ひのきしん

- ☆ 2021年1月1日(金・祝) 11時 元旦祭
- ☆ 本部おせちはございません
- ☆ 人生とは、生涯かけての心の成人・自分創り
そのために、用意されているのが
・おぢばがえり ・基礎講座 ・別席 ・三日講習会 ・修養科 ・講習
- 修養科をおすすめしましょう!(毎月、25日までに申し込み)
 - ・若い方=これからの人生の基礎固めとして
 - ・年配の方=人生の美しい集大成のために